

# もくじ

## 小学生低学年の部

最優秀賞 おじいさんに教わったこと

優秀賞 平和

佳作 やさしいまほうをかけたいな

佳作 みんながえがおの未来へ

島根県・雲南市立三刀屋小学校

石川県・金沢市立小坂小学校

島根県・雲南市立鍋山小学校

島根県・雲南市立鍋山小学校

石 飛 陽 奈 子

杉 本 賢 太 郎

名 原 杏 香

谷 戸 晴 保

## 小学生高学年の部

最優秀賞 僕にしかできないこと

優秀賞 お姉ちゃんのそばにいるよ

佳作 心を育てる

佳作 本当の「平和」

東京都・こくご塾KURU

島根県・雲南市立吉田小学校

長崎県・長崎市立高尾小学校

島根県・雲南市立木次小学校

西 原 颯 勇

岩 田 ひ な た

黒 川 海 空

福 間 美 月

## 中学生の部

最優秀賞 「命めいどう宝」

優秀賞 勉強しなければ！〜悲願のために〜

佳作 ちっぽけな奇跡

佳作 戦争のない世の中にするために

沖縄県・糸満市立高嶺中学校

広島県・盈進中学校

長崎県・長崎市立淵中学校

島根県・浜田市立弥栄中学校

幸こう地ち未み鈴れい

池いけ田だ和かず音ね

奥おく夏な奈な

串くし崎さき由ゆ菜な

## 高校生の部

最優秀賞 きつとできるから

優秀賞 差別をなくすには

佳作 生まれた意味。生きる意味。

佳作 未来への決意

広島県・盈進高等学校

東京都・東洋英和女学院高等部

沖縄県・沖縄県立球陽高等学校

神奈川県・東洋英和女学院高等部

高たか橋はし裕ひろ仁と

森もり田た莉り子こ

瀬せ底そこ蘭らん

陸くわ杜と緒お子こ

## 一般の部

最優秀賞 恐ろしい記憶

優秀賞 「今」を生きる私たちにできること

佳作 十秒の沈黙

佳作 あなたに届け 祈りの輪

山口県

鹿児島県

東京都

徳島県

久く原はら静しず子こ

中なか原はら愛あい水みな

岩いわ崎さき恵え里り子こ

渡わた辺なべ恵けい子こ

最優秀賞

おじいさんに教わったこと

島根県雲南市立三刀屋小学校二年

石<sup>いし</sup>飛<sup>とび</sup>陽奈子<sup>ひなこ</sup>

わたしのおじいさんは、やさいをそだてています。おじいさんがそだてるやさいの中で、わたしが一ばんすきなのがトマトです。すごく赤くてあまくておいしいです。二ばんにすきなのがピーマンです。にがなくてすくたべやすいです。三ばんめはキュウリです。いらいらしているときにたべるとすつきりしてやさしくなれるキュウリです。おじいさんのやさいは、どうしてこんなにおいしいのかな。まるでまほうのやさいです。おじいさんは、どんなにあつい日でもはたけに行つて、やさいのおせわをします。あついときはたけしごとほたいへんです。それでもがんばるおじいさんはすごいです。おじいさんは雨の日でもはたけに行きます。わたしだったら雨の日くらいは休みたくなります。でも、おじいさんは休みません。どうしておじいさんはまい日はたけに行くのかな。やさいがすきなのかな。わたしはずっとふしぎでした。

二年生になつて、学校でミニトマトをそだてることになりました。小さいなえがどんどん大きくなつて、赤いかわいみをつけました。わたしは、朝、学校につくとミニトマトを見に行きます。「きょうも元気だね。きのうよりみが大きくなつたよ。色も赤くなつてきたね。」わたしは、心の中でミニトマトに話しかけます。するとそれがミニト

マトにもつたわつてよろこんでいるように見えます。その時、おじいさんもわたしと同じなのかなと思ひました。やさいは元気かな。水はたりているかな。みは大きくなつているかな。おじいさんはしゃべらないやさいの気もちを考へて、わたしと同じように話しかけているんだと思ひます。するとやさいもうれしくなつて、どんどん大きくなつておいしくなるんだと思ひます。おじいさんのやさいがあまくて、おいしくて、人の心をやさしくするのは、おじいさんがやさいにいっぱいやさしさをかけているからなんだと思ひました。

わたしも友だちから、「どうしたの?」としんぱいしてもらうと元気がでます。「ありがとう。」といつてもらうと、心があたたかくなつて、人にやさしくしようと思ひます。はんたいに、しらんかおをされるといやな気もちになつて元気がでなくなります。人もやさいものちがあるものは、みんな同じなんだと思ひます。

おじいさんは、「ひな子もおとなになつたらやさいをそだててみるといいよ。」と言ひます。やさいをそだてることで、わたしにやさしい人になつてほしいのかな。わたしは、友だちや家ぞく、まわりにいる人をよく見て、どんな気もちでいるのか考へられるようになりたと思ひます。そして、自分から声をかけたり、こまつている人がいたらたすけてあげたりしたいです。みんながあたたかい気もちになつて、やさしさがつながつていつたら、みんながしあわせになれると思ひます。

優秀賞

平和

石川県金沢市立小坂小学校三年

杉本賢太郎

ぼくにとって「平和」ってなんだろう。

家族とその日にあった出来事を話してわらい合うこと。学校で勉強したり、友達とたくさん遊んだりすること。遠くに住んでいるおじいちゃんとおばあちゃんに会いに行けること。考えてみれば、いつも当たり前だと思っていることが、ぼくにとっての「平和」なんだと気が付きました。

今年は新型コロナウイルスが流行して、ぼくの通う小学校もりん時休校になりました。何が起こっているのかよくわからないまま、友達とも先生とも会えなくなりました。り任式もなく、お世話になった先生に直せつお礼も言えないままお別れしてしまいました。それに、ゴールデンウィークには毎年遠くに住んでいるおじいちゃんとおばあちゃんに会いに行くのに、今年はそれさえも行けませんでした。

休校中、お父さんとお母さんが交代でぎいたくきんむしてくれました。最初はいつもしよにいられるのがうれしかったけれど、やっぱり学校に行つて勉強したり、友達と遊んだりしたい気持ちだんだん強くなってきました。そして、友達や先生、おじいちゃんやおばあちゃんに会いたい気持ちと、会えないという悲しい気持ちでいっぱいになりました。

五月の末になってやっと学校が再開したのに、休み時間は友達と思いっきり走り回って遊ぶことができませんでした。また学校が休校になるかもしれないと不安にもなりました。

そんな大変な状況なのに、今度はくま本県や長野県で大雨がふり、たくさんの方が亡くなったり、家がこわれたりしました。ぼくが住んでいる石川県でもずっと大雨がふっていたので、ひと事だとは思えず心配になって、テレビを見てみると胸が苦しくなりました。きっと大雨がふるまでは、当たり前「平和」な時間が続いていくと思つていたはず。家族や友達と過ごす「平和」な時間は戦そうだけではなくて、病気や自然さいがいせいでもかたんにこわされてしまうものなんだと強く感じました。

おじいちゃんの家には、兵たいさんの写真がかざられています。戦そうで死んでしまったひいひいおじいちゃんです。きつとひいひいおじいちゃんも家族や友達と過ごす「平和」な時間を守りたかつたのだらうなと思つていました。

世界を見わたせば、今もあちこちで戦そうが続いています。人と人が戦わなくても、これからぼくたちは病気やさいがい立ち向かわなければなりません。だから、せめて人がみんな「平和」な時間をこわさないようにしたいと思つています。そのために、ぼくも永井先生のように、「人にやさしくすること」を大切にして、みんなの「平和」な時間を守つていけるようになります。

佳作

やさしいまほうをかけたいな

鳥根県雲南市立鍋山小学校一年

名<sup>な</sup>原<sup>はら</sup>杏<sup>きょう</sup>香<sup>か</sup>

「きょうかちゃん、いつしよにやろうか。」あいかさんはわたしにそういつてくれました。

たいいくのじかんにいきものらんどをしました。どうぶつやうみのいきものやむしのまねっこをするベンキょうです。わたしは、このベンキょうがあまり好きじゃないなどおもっています。きょうはせんせい、かあどをひいてくださいといわれて、かあどをひいてみると、「さめ」とかいてありました。わたしは、どうやってまねっこすればいいのかわからなくて、しんぱいになりました。

とうとうわたしのじゅんぱんがきました。やっぱりどうしていいのかわからなくて、じっとしていたら、あいかさんがこえをかけてくれました。わたしは、さっきまでのどきどきがなくなりました。そして、できるかもしれないとおもいました。あいかさんは、いつしよにさめのまねっこをしてくれました。あいかさんがいつしよにやってくれたので、わたしはじょうずにさめのまねっこができました。わたしはそのとき、あいかさんはとてもやさしいなあとおもいました。

あいかさんはやすみじかんにもよく、

「きょうかちゃん、いつしよにあそぼう。」

といって、わたしをさそってくれます。そういわれると、

とてもうれしくなります。あいかさんとあそぶのはたのしいです。やっぱりあいかさんはやさしいひとなんだなあとおもいます。

わたしも、いつもともだちにやさしくしようとおもっています。おともおんなもかんけいなしで、やさしくしようとおもっています。でも、あいかさんみたいに、ひとりでだれにでもやさしくすることは、まだはずかしいからなかなかできません。だから、あいかさんはすごいなあとおもいます。

わたしは、もしも、だれかにやさしくしたら、そのひともうれしいきもちになるかもしれないとおもっています。わたしは、あいかさんにやさしくしてもらったとき、すぐうれしかったです。そして、わたしもだれかにやさしくしたいなあとおもいました。こういうきもちが、一ねんせいみんなにつたわって、なべやましようがこうのみんなにもつたわっていったら、みんながっこうがたのしくなったり、ベンキょうをがんばるきもちになったりするんじゃないかなとおもいます。

やさしくすることって、とてもすてきなことだとおもいます。みんながうれしくなって、たのしくなって、がんばるきもちがでてくるまほうみたいです。だから、わたしはこれからもあいかさんみたいに、ともだちにやさしくして、みんなに「やさしいまほう」をかけていきたいです。

佳作

みんながえがおの未来へ

鳥根県雲南市立鍋山小学校三年

谷戸晴保

ぼくは、三刀屋で育った永井はかせのことをそんけいしています。はかせは、おいしやさんになった人で、とてもやさしい人です。自分がびょうきになって苦しい時も、人のために役に立とうとがんばっていたから、本当にすごいと思います。

はかせは、せんそうの本を書いています。

ある日、ぼくがその本をよんでいる時に、分からないことがあったから、おばあちゃんに聞くことにしました。

ぼくのおばあちゃんは、九十五才です。車いすののっていて、たまに自分で歩くこともできます。とつてもやさしいおばあちゃんです。ぼくがせんそうのことを聞くと、おばあちゃんは、かなしそうなかおで

「せんそうのことは、思い出したくない。」

と、言いました。ぼくは、もうなにも言えませんでした。

おばあちゃんは、子どものころ、せんそうで家ごとくとはなればなれになってさみしかったそうです。きょうだいともはなればなれになって、そのきょうだいがある、そのままなくなってしまうとお母さんから聞いたことがあります。ぼくは、四人きょうだいで、お兄さんと妹が二人います。けんかをするのがよくあるけれど、おばあちゃんみたいに、はなればなれになるのはいやです。家ごとくみんな

でいっしょにいたいのです。

はかせの本をよんで、ぼくは、原ばくのことでも知りませんでした。ぼくのおばあちゃんとはかせは、同じせんそうをけいけんしていることが分かりました。せんそうは、こわくて、つらくて、やっではいけないと思いました。

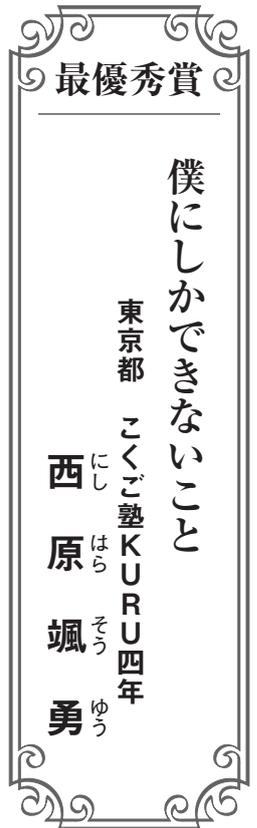
はかせは、自分がびょうきになっても、本を書きつけていました。きっと、はかせはぼくたちにつらい思いをしてほしくないと思っていたのではないかと思います。

ぼくは、永井はかせのように、やさしくて人の役に立つ人になりたいです。

今、ぼくは、学校で大すきな絵をかいたり友達とフリスピードッジをしたりするのがとても楽しいです。ぼくは、友だちをだいにしたいから、わるいことばを使わないように気をつけています。ときどき、はらが立つこともあるけれど、心の中でグツとがまんして考えてから言うようにしています。なかなかむずかしいけれど、やっていると、友だちもやさしくしてくれるから、次もつづけようと思えます。

まい日、学校に行く時には、おとうさんやお母さんが「行つてらっしゃい」とえがおで見おこってくれます。それで、一日ががんばろうと思えます。

きっと、今のぼくは、平和なのかなと思います。これからも、家ごとくや友だちを大事にしたいです。そして、大人になったら、みんながえがおで気もちよくすごすことのできる未来をつくりたいです。



僕は、誕生日にお祝いをしてもらったことがない。誕生日が過ぎたあとだったり、旅行中だったりした。母に、「今年は家で誕生日をお祝いしてくれる?」と、聞いたなら「考える。」と言う。三日くらいあと、リビングのテーブルの上に、『8月6日のこと』という絵本が置いてあった。あけてみた。瀬戸内海を書いた青いページがきれいだなあと思ったけれど、おもしろくなさそうだったから、パラパラとページをめくったら、黒と白のページがあった。「それはアメリカくんがおとしたげんばくでした。ピカッとひかってドーンとおとがあとからやってきたのでみんなは『ピカドン』とよびました。」と書いてあった。青い色とあまりにちがっているの、なんだかどきんとした。そして、次のページをめくったら、息がとまりそうになった。茶色に黒でたくさんの人の形が描いてある。さらにページをめくった。すると、今度は本当に息が一瞬止まった。赤茶色に黒い人がくちをあげている絵だった。怖くて、本を閉めた。表紙をもう一度みた。『8月6日のこと』と書いてある。8月6日は僕の誕生日だ。

学校の授業で広島と長崎に原爆がおとされたことを習った。広島に原爆が落とされた日が八月六日だったのだ。忘れていた。母がこの本を僕に見せた理由が分かった気がし

た。8月6日は僕が生まれた日で、広島に原爆が落とされた日だ。その日は起きるとテレビがついていて、原爆についで式の式を中継している。思い出すと、毎年その様子を見ていた。母は僕に考えてほしかったんだと気が付いた。そして、僕は母に「お誕生日会はいつでも良いよ」と言った。

二〇一九年八月六日、王子の祖父母が誕生日会をしてくれた。僕は嬉しい日だけど、悲しい日の人もいる。『8月6日のこと』の最後のページに、「おかあさんはこととして82才。」とある。原爆を経験した人がどんどん年をとっている。

僕が「8月6日は僕が生まれた日」「8月6日は原爆落とされた日」「平和の大切さを考える日」と伝えていこうと決心した。これは、僕にしかできないことだからだ。

優秀賞

お姉ちゃんのそばにいるよ

島根県雲南市立吉田小学校五年

岩<sup>いわ</sup>田<sup>た</sup> ひなた

私のお姉ちゃんは三年ほど前に大きな手術をしました。私はその時まで低学年でした。

手術に向かつて入院したときには、お姉ちゃんはまだ笑顔でした。それから少しずつ治療が進むにつれて、笑顔が減っていきました。でも、お姉ちゃんは「辛い」とか「痛い」とか「嫌だ」なんてひとつも言いませんでした。きっと心の中では叫んでいたんだと思うの……。

そして、手術を控えたある日、「中三のお姉ちゃんは受験だし、妹はまだ幼いから、病気になったのが私でよかったな。」お姉ちゃんは、そう言ったんだそうです。そして、同時に「でも、こわい。」とも。私は、それを聞いて、涙が止まりませんでした。

手術を終えたお姉ちゃんの顔は、手術の影響でパンパンに膨れあがっていました。私は正直、「誰なの?」って思ってしまった。そしてふくれあがった顔の理由に気づいた私はただ黙っているしかありませんでした。

永井隆さんは、戦火の中で、妻の緑さんを亡くしてしまいました。原爆が投下された後の焼け野原の中で、ロザリオの鎖がまとわりついた骨を見つけ、それが妻の骨だと確信して、そっと拾い上げ、かすかなぬくもりを感じました。そして「ごめんね。ごめんね」と妻がつぶやいている

ように感じて心を熱くしました。

私は、隆さんの気持ちがよくわかります。妻のつぶやきを思い浮かべ、自分の力のなさを感じてふるえる様子は、私がお姉ちゃんの病気の前に何もできなかった思いと重なったからです。そして、一緒になって涙をこらえて、緑さんとお姉ちゃんのことを思い浮かべ、これからの自分について考えました。

私は、家族の中で一番、いや、この世の中で一番お姉ちゃんと過ごすことが多かったことに気づきました。だから、お姉ちゃんがない時は眠れませんでした。父さんや母さんといてもさみしい気がしたし、一人の時は、さみしさに耐えきれませんでした。きっとお姉ちゃんもつとそう思っていたのでしょう。

お姉ちゃんの四回に及ぶ手術は、無事成功しました。たまたま体調を崩すことがあるけど、自分でリズムを整えて、続けて休まないように努力しています。家族がそろって、何気ないことで笑ったり、お話ししたり、そんな小さな幸せがとっても大切に思えています。

「あんたといっしょにおると、楽しい。」って、お姉ちゃんが言ってくれました。私も、「お姉ちゃんといると幸せ」って思います。

平和について考えて、調べ始めた永井隆さんの生き方から、私は、家族への愛情について深く考えることができました。お姉ちゃんは、これからも病氣と闘っていきます。家族も一緒です。私はいつもお姉ちゃんのそばにいます。だって、私がいるとお姉ちゃんが楽しくなるから。そうだよ、お姉ちゃん。

佳作

心を育てる

長崎県長崎市立高尾小学校六年

黒川海空

うちの庭にみょうががなりました。

「ひいばあちゃんが植えていたのをお父さんがもらつてきたとき。よーなつたばい。」

しそもひいばあちゃんが庭で育てていたものを祖母が育てています。もらつてきざんでそうめんを食べるのが大好きです。家族でそんな食卓を囲むことが最近幸せだと感じます。

ひいばあちゃんは今年の二月に亡くなりました。九十三才でした。長生きできたのはあの日を生き抜いたからだと思います。

八月九日長崎原爆の日。ひいばあちゃんは十八才ぐらいで、電話交換所で働いていて、爆心地からはなれていたの助かったのです。夏に近づくといいばあちゃんの話を出します。当時一番大変だったのは、食べ物がなかったこと。ひもじい思いが一番嫌だったそうです。だから、ひいばあちゃんにはなすびキュウリ、トマト、芋等の野菜を育てていたのかなと思います。小学校で被爆投下後焼け野原となった地にクスノキが復活したと勉強しました。植物が元気に育つことは平和の証だと思えます。そして、それをいただけるのは本当に幸せなことです。

私は今幸せだと思います。好きな物が食べられて、おしゃべりしたり、ダンスを習ったり、旅行に行けたり楽しいことが

たくさんあります。でも世界は？日本は？と聞かれるとはつきり平和だとは言いきれません。貧困、食糧難、環境問題、戦争等たくさん問題があり、困っている人がいるからです。さらに、今世界は新型コロナウイルスが大きな問題となつています。私は何をしたらいいかわかりません。でも大切なことは相手を思いやることだと思います。習い事に行く日は永井隆博士の「如己堂」前を通ります。そのたびに「己の如く、隣人を愛しなさい」という言葉の重みを感じます。優しい心が育てば、幸せは増えていくと思えます。そのためにはまず学ぶことだと思います。戦争の歴史、辛い思いをした人たちの思いを知ることだと思います。

ひいじいちゃんは戦争にいきました。ひょうきんな人だったらしいですが、ある手帳を見ながら泣いた日のことを忘れられないと母は言います。手帳には兵隊の名前が書かれてあり、名前の上にとびとびに線が引かれていたのです。そしてこう言つたそうです。

「この線は戦死した人の名前の上にひいたとよ。戦争は悲しかー。」

戦うのが怖くて穴を掘って隠れた話。足に残る銃弾の跡。いつもと違うひいじいちゃんの様子にまだ小学生だった母も胸がつまる思いがしたそうです。

『如己愛人』：私達は人を愛することができているでしょうか。思いやりの心を育てることが平和への第一歩だと思います。ひいばあちゃんが残してくれたみょうがやしそを引きつぐように幸せも引きつぎたい。日常の平凡な食卓から平和の味をかみしめたいです。

佳作

本当の「平和」

島根県雲南市立木次小学校六年

福ふく間ま美み月づき

今、日本では戦争がありません。私は、戦争のないこの社会は、本当に平和だと言えるのだろうかと考えようになりました。もちろん平和だと考える人もいるでしょう。ですが、私はそうではないと思います。

今から七十五年前、長崎に原子爆弾が投下されました。その時、自身が白血病を患いながらも、被爆した人々を一生懸命に看病した人がいます。永井隆博士です。私は、総合的な学習の時間に永井隆博士について知りました。永井隆博士は、「如己愛人」「己のごとく人を愛せよ」という言葉を残しておられますが、その言葉にあるように、とても思いやりがあつて、優しい人です。自分が大変な病気で苦しんでいるのに、人のことを考えておられたからです。

私は、最近の日本人から、人を思いやる心が少なくなっているように思います。私が特に気になっていることが、ネット上でのいじめやひぼう中傷が多いことです。ネット上だと、相手の顔が見えなかったり、簡単にコメントしたりできるので、軽い気持ちで悪口などを書きこむことができますと思います。ですが、その短いコメントでも、読んだ人はとても深く傷つくこともあります。わたしも、こうしたトラブルが起きないように、スマートフォンを使う時に気を付けています。

木村花さんというレスラーの方がおられました。木村さんは、ネット上でいろいろな人から悪口を書きこまれたにもかかわらず、笑顔でテレビに出続けておられました。そんな木村さんが自殺をしたというニュースを知りました。ネット上で軽い気持ちでひどいコメントを書きこんだ人たちは、自分がそのコメントを受けたらどんな気持ちになるのか考えなかったのでしょうか。自分がひどいコメントをしていることに気づかなかつたのでしょうか。少し悲しい気持ちになりました。

また、今は新型コロナウイルスが流行しているため、病気になった人に対する偏見や差別もあるそうです。本当なら、世界中の人が協力して、新型コロナウイルスを無くするための努力をしないとけません。それなのに、同じ人間として、してはいけないひどい行動をとっています。

最近の悲しい出来事を見たり聞いたりするたびに、私は、「言葉の武器」を使って人を傷つけている人がいると感じます。戦争が起きていた時代は、兵器でお互いが傷つけ合っていました。今の時代、兵器で傷つけ合うことは無くて、言葉で傷つけ合っています。だから、本当に平和になるためには、言葉でも人を傷つけることがないように、お互いを思いやるのが大切だと思います。

永井隆博士の「如己愛人」の言葉のように、相手の気持ちを考え、思いやりの気持ちをもって人に接していくことは、戦争のない今の時代でも大切なことだと思います。

最優秀賞

「命どう宝」

沖縄県糸満市立高嶺中学校三年

幸地末鈴

私が住んでいる沖縄は、かつて太平洋戦争の戦場でした。国内最大の地上戦とも言われており、沖縄戦では、軍人よりも住民の命が多く失われたそうです。私の祖母は沖縄戦の体験者です。祖母は当時五歳でしたが、幼い祖母にも戦争は容赦がありませんでした。恐ろしい体験は、現在八十歳になった祖母の記憶に、いまだに残り続けています。空からの攻撃や銃を持って攻めてくる米兵、それらの襲撃から逃げるために、祖母とその家族は何日間もガマに入って身を潜めていたそうです。

ガマの中にはすでにたくさんの方が避難しており、座って休む場所すらありませんでした。ガマの中は暗く、足下も見えない状況でしたが、疲れていた祖母は、座る場所を探し求め奥へ奥へと進んでいきました。すると、いきなり足場がなくなり、落ちそうになりました。一生懸命に座る場所を探して歩き回っていた祖母は、どうやらガマの中の崖のようなどころにたどり着き、足を踏み外してしまっただけです。ぎりぎりのところで岩にしがみつき、一命を取り留めました。小さい身体には限界があり、岩にしがみついているのもすぐに辛くなりました。声を出そうにも、出しても米兵に見つかってしまうかもしれない、という恐怖心から声を出して助けを呼ぶこともできません。足場が崩れ、砕けて小さくなった岩が崖の下に溜まっていた水に落ち、ポチャンと音を立てました。この音を聞いた祖母の父親は、祖母がいけないことに気づき、

「ヨシ子ー。どいねー。」

と、敵に見つかるのも恐れずに呼びかけてくれました。祖母も

「おとー。どいねー。」と返事をし、その声を聞いた父親は、祖母を見つけ、腕をつかみ、崖から救ってくれたのです。その時、祖母は父親の胸の中で静かに声を殺して泣いていたそうです。

もし、あの時、祖母がいけないことに誰も気づかなかつたら……。そう考えるとすごく恐ろしいです。私も、私の母も、姉も、兄も存在しないことになるのです。祖母の周りでは沖縄戦当時、集団自決で亡くなった家族もいたそうです。そのような状況でも、祖母の家族は「生きること」を選んでくれたのです。そして、命は繋がっている、と改めて私に教えてくれました。

私達が住む沖縄で、今課題となっているのは、戦争体験者の話の次の世代へどう伝えるのか、ということ。今の時代、戦争体験者の方は年々少なくなり、戦争の悲惨さを直接聞く機会が失われつつあります。沖縄には、ひめゆり平和祈念資料館や平和祈念資料館などの多くの資料館で、体験者の方々の映像を見たり、聞いたりすることが出来ます。その資料などを見たり、聞いたりしていると、まるで祖母の話の聞こえているかのような気持ちになり、胸が締め付けられます。

資料館を訪ねながら、「私には何が出来るのだろうか」と考えてみました。そして、祖母の話が、どこの資料館でも紹介されていないことに気づきました。沖縄には、私達のように、家族のみが知っている戦争体験者の話があるのだと思います。それを家族の話に留めず、色々な方法を使って広めていくことが、私なりにできる平和への貢献だという結論に至りました。

少なくなった体験者の方々の声を届けることができるのは、今を生きている、そして未来を託された私達です。戦争と向き合い、戦争を知らない人達に少しでも体験者の想い、声を届けたいです。沖縄では、「命（ぬち）どう宝」とよく言います。「命は宝だ」という意味です。私の作文を通して、より多くの方が「命どう宝」の精進を知り、平和な世の中を創りたい、と思ってもらえると嬉しいです。

優秀賞

勉強しなければ！悲願のために！

広島県盈進中学校二年

池田和音

「勉強しなければ！」と思う。ヒロシマ、ナガサキの悲願である核兵器廃絶のために。

私は中学生になった昨年、福山や広島街頭に立ち、核兵器廃絶の署名を集めている。特に広島での活動では、外国人に出会うことが多いので、外国人に署名を求める英語を先輩から学んでいた。「We're collecting signatures to abolish nuclear weapon. If you agree, could you write your name and address here.」

昨夏、原爆ドームのあたりで米国人女性が、私の英語にっこり笑って署名に応じてくれた。彼女は署名しながら私にこう質問した。「Are there A-bomb survivors in your family?」これには難なく「We don't have A-bomb survivors」と答えられたが、次の質問に焦った。「What do you think of nuclear deterrence theory?」「nuclear deterrence theory」がわからなかったのだ。作り笑いでごまかす自分がいやだった。しばらくして、それを見ていた先輩が「核抑止論をどう考える?」って質問だったのよ」と教えてくださったが、後の祭りだった。立ち去って行く外国人の顔が悲しそうに見えた。彼女は広島で、広島に暮らす私たちと、平和について語りたかったのでないか。そのきっかけを私が潰したのではないかと考えると、悔しくて自分がとても惨めだった。ちゃんと英語で会話やディスカッションができたなら、その出会いとおして、核兵器廃絶の仲間を増やすことができたのに…。私にもっと英語力があれば、これまでに知り得た被爆者の苦しみや被爆者の平和を希求する信念を届けることができるのに。この経験が、しっかりと英語を勉強しようと思っただけでなかった。

現在、世界に約一万三千発もの核兵器があるとされている。核の

脅威をちらつかせて保たれている世界は、本当の「平和」ではない、と私は考える。では、おのおびただしい数の核兵器を廃絶するためには何が必要なのか。

約3年前の7月7日、国連で核兵器禁止条約(核禁条約)が成立した。私は、署名活動をいっしょにやっている先輩方の勉強会に参加したが、核禁条約の現在を知らなかった。知らずに私は、「被爆国日本の政府は、直ちに核禁条約に参加するべきだ。それが被爆75年を迎える日本の歩むべき道だ。」と言っていた。そう言っていた自分が恥ずかしくなって、仲間と積極的に勉強するようになった。

核禁条約は、批准国が50に達すれば90日後に法的な効力を発する。オーストリアやメキシコなどがリードして今年7月7日現在、核武装をやめた南アフリカ、核実験被害国のカザフスタンなど38カ国が批准。核禁条約の成立に尽力した国際NGO核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)は、その理念を実践するために、世界中で、「核兵器にお金を貸すな」という運動を展開している。日本では、りそなホールディングスが取引停止を宣言し、三菱UFJフィナンシャルグループも核兵器製造への融資を禁じた。私はこの学習をおして、核兵器廃絶のためには、署名活動も重要だが、それだけではなく、多面的な取り組みを世界が連帯してやらなければならないと痛感した。そして、これからも常に、国際情勢を勉強しなければならないと思うようになった。

核禁条約の前文には、「被爆者の苦しみに留意する」と書いてある。「核廃絶は被爆者の苦しみが原点」。ヒロシマの核廃絶をリードしてきた故・森瀧市郎先生のことはだ。森瀧先生は「人類は生きねばならぬ」とも語った。私は、人類が生存するために、なんとしても私たちの手で、核兵器廃絶を成し遂げなければならないと思う。そのために、私自身が勉強して、語学力や知識を得なくてはならない。「ノーモア・ナガサキ」の魂である永井隆先生の「如己愛人」や、「ノーモア・ヒロシマ」の魂である森瀧市郎先生の「力の文明から愛の文明に」の精心を、そして、もうすぐ直接聞かれなくなる被爆者の苦しみを、私が英語で世界中に発信すると、改めて決意している。

## 佳作

## ちっぽけな奇跡

長崎県長崎市立淵中学校二年

奥おく夏な奈な

私は、今生きている。手足があつて、音が聞こえて、周りのものが見える。青空の下で走りまわったり、テレビを見て爆笑したり、宿題を忘れて先生に怒られたりだつてする。それらが「当たり前」だと思ふ人もいるかもしれない。はたして、それらは本当に「当たり前」なのだろうか。

私は、小学校四年生のときに、長崎県長崎市にある城山小学校に転校した。初めて小学校を見たとき、とても驚いたのを覚えている。大量の千羽づるや、なにかの石碑、少年が立っている像……。それらは何なのか、わかるようになったのは、総合の平和学習で教わったからだ。城山小学校は、平和教育に力を入れている被爆校だった。

私は、それまで平和や戦争について考えたことがあまりなかった。平和は大事、戦争はダメ、そういうふうな漠然と思っただけだった。爆弾によつてどのような被害を受けたのか、爆弾が落ちた後どのような暮らしをしていたのか……。私は、必死でみんなについていこうと勉強した。本やインターネットでも調べたが、一番、衝撃を受けたのは、被爆校舎を見たときと、家族の話聞いたときだ。

被爆校舎は、被爆した旧校舎の跡で、現在は、被爆当時のものや写真、絵などを展示する平和祈念館となっている。私は、その中でも、「城山小学校の校庭からたくさんの死体が見つかった」という新聞記事がとても心に残っている。これらの死体は、原爆で亡くなった方々だと考えられていて、城山小学校の児童は、それらの上で遊んだり、体育の授業を受けているのだ。黄色い帽子をかぶつて走り回る一年生、ブランコに乗って靴飛ばしをしてい

る子、体育の授業で鉄棒の逆上がりのしかたを教え合っている子たち、そんな子どもたちを見て、原爆で亡くなった方々はとう思ふのだろうか。喜んでくれるだろうか、それとも、自分たちも平和な時代に生まれたかと思ふだろうか……。私たちは、簡単に「死ね」「消えろ」と言うが、それが現実で起きたら、どんなに恐ろしいことなのかがよく分かった。

こうやって、平和や戦争について調べていたときに、家族から、とても衝撃的なことを聞いた。私が、「被爆四世」だということを一。

私の曾祖母は、被爆当時、長崎に住んでいた。太平洋戦争真最中の夏の日に、空がピカッと光った。そのとき、曾祖母は、木に登っていた長男を連れて、急いで防空壕の中に入ったそうだった。曾祖母が住んでいた場所と原爆が落ちた場所の間には、山がある。その山のおかげで、曾祖母は助かったのだ。長崎に原爆が落ちて少しした頃、日本は降伏した。しかし、苦労はこれからだった。子どもに食べさせるために、いろんなところに行つて食料を探したそうだった。子どもに食べさせて、自分は食べられない日もあつたという。そんな曾祖母は、私が生まれる数年前に亡くなった。

私は、怖かった。曾祖母が死んでいたら、私は生まれていないから。私は自分が生きていることが「当たり前」ではなく「奇跡」なんだということを心から感じた。おいしいご飯を食べられること、きれいな洋服をきられること、夜にぐっすり寝られること、それらのすべてが「当たり前」ではなく、「奇跡」だということだ。

私は今、中学校に通っている。朝、登校して友達とおしゃべりしたり、先生の授業を受けたりする。毎日毎日、同じことを繰り返しているようだが、普段の生活には「奇跡」がたくさん存在している。平和とは、ちっぽけな「奇跡」の繰り返しだ。みんなにも探して見てほしい。身の回りには「奇跡」を。

## 佳作

## 戦争のない世の中にするために

鳥根県浜田市立弥栄中学校三年

串崎由菜

一九四五年八月六日。この日、広島に原子爆弾が投下されました。私たち人間が、初めて核兵器を使用した日です。

この春、私が「平和のバトン」という本を読んでいる時のことです。この本について母と話す中、自分自身が被爆三世と知り、奇跡の重なりで生きているということを知りました。祖父が一歳の時に原爆が落とされたことと母から聞きました。また、高祖父が、原爆症で亡くなったことも、その時初めて知りました。被爆後、避難する時に私の曾祖母は、「祖父と祖父の双子の兄を連れて川沿いを走った時に見た光景を二度と忘れない。」と言っていたそうです。私の祖父は小学校三年生の時に、四国地方の宇和島に転校しました。そこでは、「原爆の子」と言われ続け、いじめにあっていたそうです。

私は母の話を聞いて、言葉を失いました。私の家族に起こったこの事実を知るまでは、どこか他人事としか感じていませんでした。そして、母が被爆三世であると伝えてくれた理由を話してくれました。母は、小学校の時から高校生まで十二年間平和学習をしてきたそうです。だから、娘の私にも「平和について考えることの大切さ」を知ってほしいという願いから伝えてくれました。広島の方は、平和学習を積み重ねてきた分、平和に対する気持ちが強いことが分かりました。

私が「平和」に対して考える契機となった「平和のバトン」という本は、高校生が被爆者の方の体験をもとに絵を描いて伝えるというプロジェクトの話でした。この本を読んで、たくさんの高校生が、あの時に起こった事実を忘れず次の世代につなげるために、被爆者の方から詳しい話を聞いて、当時の風景や惨劇の様子

などを描いていることを知りました。被爆者の方も、高校生に細かい直しをおしゃつていたので、未来を担う私たちに当時の事実を知ってほしいという気持ちが伝わりました。私はこのプロジェクトに心を奪われました。

近年、語り部の方が少なくなる中、私たちにできることは、被爆の事実を絵で描くことで伝えられることが分かりました。また、絵だけでなく言葉や文字で、聴いたり読んだりしたことを伝えることができる気がしました。今、私たちにできることをやらないと、また戦争は起きると思います。

母の話を聞くまでは、原爆は終わったことだから、私には関係ないと思っていました。母は、私に話せてよかったと言ってくれました。自分の家族やヒロシマで何が起こったのか考え続けていなくてはならないと思いました。人類は今なお、原爆を手放してはいけません。被爆三世の自分にも、原爆の恐ろしさを伝えることができる気が、以前と比べて今ある「平和」に対する考えが変わりました。今生きている人のほとんどは被爆者ではないし、全員が被爆二世・三世とも限りません。だからといって、自分には関係ないではなく自分の国で起きたことだから、知ることが大切だと強く感じました。

今年は、戦後七十五年を迎えます。語り部の方が少なくなっている中、次の世代へ平和の尊さを伝えていけるのは私たちしかいません。だから、自ら被爆者の方に話を聞きにいたり資料を読んだりして、過去に起こった原爆の惨劇を受け止めなければならぬと思います。これからの社会を築いていく私たち若者は、もつと今ある平和の尊さを意識して、平和について語り合うことが重要だと思います。自分で考え、違う意見をもつ人も尊重しあうことで平和を築いていけると思います。

核兵器のない世界にするためにも、私は、自分とは異なる立場や考えをもつ人も、心を繋ぎ合って生きていきます。

最優秀賞

きつとできるから

広島県盈進高等学校一年

高橋裕仁

「地道に、謙虚に。」私が常日頃、大切にしていることだ。私は中学一年から平和や人権の活動をしている。なかでも、広島に生まれ育った者として、核兵器廃絶の活動に力を入れている。被爆証言を聞いて、文字におこして記録する。酷暑でも厳寒でも、核兵器廃絶の署名を集めるために街頭に立つてきた。私は、これらの活動を、仲間たちといっしょに力を合わせてやることに誇りを感じている。

しかし、私はまったく目立つ存在じゃない。リーダーシップも乏しく、人前で話すのも苦手だ。だから、私の存在は、仲間たちのなかに埋もれているかもしれない。

今年一月下旬、私と仲間たちが福岡県筑紫地区の「人権・平和集会」に招かれ、日頃の活動を発表する機会に恵まれた。被爆証言を中心に、活動のようすや自分たちの主張を、自分たちでスライドにして組み合わせ、「パワーポイント」を使って発表するのだ。

リハーサルで会場に入って、いきなり心臓がバクバクしてきた。会場は約二千人の収容が可能だという。「こんな大きな場所であんなとやれるだろうか」と緊張し、心配になったのだ。地元の人権・平和集会での経験は何度もある。でも、これまでいちばん多くて、観客は約四百人だった。それでも緊張したのに、今回満席となればその5倍の多さである。

私は、そのような発表の時、裏方としてパソコンを操作することが多い。仲間と作成したスライドの内容点検も私の役目である。被爆証言を正確に伝えるためには、誤字脱字は許されない。スライドに記す文字が的確な表現かどうかにも念入りにチェックする。また、それが、仲間のナレーション（台詞）と合致しているかどうかの点検も欠かせない。スライドの文字とナレーションとにズレが生じた

ならば、観てくださったさっつているお客さまの思考を妨げてしまうからだ。そうならないために、私たちは普段から何度も確認や練習を行うが私は裏方に徹して、被爆者の平和への願いができるだけ多くの人に届くように、ミスのない発表を丹念に準備している。

約60分の発表のなかで、裏方を離れ、私が脚光を浴びる時がある。広島県原爆被害者団体協議会・坪井直理事長（95歳）の「魂の叫び」を、私が彼に代わって会場に訴える場面だ。仲間たちは女性が多いので、こんな時、男性の私は貴重な存在なのだ。

会場は満席。極度の緊張に襲われた私。ステージ大画面に映し出された核兵器廃絶を鬼の形相で訴える坪井理事長の写真を横に、私は坪井理事長になりきってこう訴えた。声も言い回しもできるだけ、坪井理事長に似せて。

「命の奪い合いをする戦争は絶対反対。ましてや、一瞬にして多くの命を奪う核兵器は、非人道の極み。絶対悪。核兵器はこの世に、絶対に一発でもあってはならない！」

今年是被爆75年。新型コロナウイルスが高齢化した被爆者の活動に制限をかけ、いのちそのものを容赦なく脅かしている。その被爆者へのアンケートで、「被爆体験の継承が進んでいるか」との質問に対し、「進んでいる」「ある程度進んでいる」が約41%。「あまり進んでいない」「全く進んでいない」も約41%と報じられている（『中国新聞』7月24日）。

「ただ一発でこれだけの生命を奪い、これだけの破壊を逞しゅうした爆弾は一体何者であろう」（『長崎の鐘』）。永井博士と坪井理事長のことが私のなかで重なり、私は、私なりに彼らの平和を希求する思想と行動を継承し、彼らを含む被爆者の希望となると決心する。

筑紫地区の「人権・平和集会」終了後、私たちのもとへ、観客の中学生が泣きながら駆け寄り、こう言ってくれた。「核兵器は絶対にあつてはいけなさと確信しました。私も自分にできることをやります」。私はうれしくて、彼女にこう答えた。「いっしょに、地道に謙虚に努力しよう。きつとできるからね」と。

## 優秀賞

## 差別をなくすには

東洋英和女学院高等部二年

森田莉子

生まれて初めて、見知らぬ人から差別的な感情を向けられたとき、あなたはどうか感じるだろうか？

私は、小学生の頃に家族でアメリカ旅行に行った際、現地の同年代の男の子に冷たいまなざしと口調で差別的な発言をされたことがある。当時、英語を学んだことのなかった私でも、それは完全な偏見であり、負の感情を含んだ言葉だとすぐに感じた。むき出しの憎悪を目の前にして、私は一言も発することができず、その場に立ちすくんだことを今でも鮮明に覚えている。彼がなぜその行為に至ったのか、人々はどのようにして差別をしようのか、その頃の私にはどうしても理解ができなかった。しかし、新型コロナウイルスが大流行する現在、その答えのヒントとなる出来事が世界中で起きていることに私は気が付いた。

そのうちの一つがインドで起きたイスラム教徒の集会での集団感染だ。これにより、現地では少数派である彼らが差別の対象となり、イスラム教徒が感染源だと一部の政治家が主張した。また、イスラム教徒であることを理由に、病院での診察を拒否され、死亡してしまった人もいる。

私たちにとって、「恐怖」とは何だろう。確かに、新型コロナウイルスの終息の時期が分からず、感染者と非感染者の区別もつかないことは完全な恐怖である。しかし、このような「未知」に対する恐れが今まで奥底に沈んでいた差別を表面化させている。「恐怖」は単なる「恐怖」ではなく、時として「未知」なものに対する差別的感情を含んだものとなり、他者の生命をも脅かすことに人々は気づくべきだ。では、どのようにすれば、この「恐怖」を断ち切ることが出来るのだろうか。

これについて考えたとき、小学生の頃のある記憶がふと私の胸をかすめた。それは、韓国人の男の子が学校に転入してきたときのことである。私は緊張で怖気づき、授業の説明などを一方的にするだけで、仲を深められずに別れの季節を迎えた。当時の私は、言語も考え方も違う人と分かり合うことは難しいと思っていたが、中学三年生の夏、カナダへ語学研修に行った際、自分の考えを改める機会を得た。現地の寮の人々やホストファミリーが温かく私たちを受け入れ、積極的に話しかけてくれたのだ。また、ホストファミリーと私たちが自国の料理をふるまい合い、互いに文化を教え合った。楽しい時間を過ごせた反面、韓国人の男の子との出来事が思い出された。彼を知ろうとしなかったこと、恐れをなして、受け身で接していたこと、これらが「差別」の原因になるのではないのかとはっとしたのだ。

人は「未知」なものに「恐れ」をなす。知ることを拒み、相手を否定し、対立を生む。中世の欧州で起きたペストの流行で、感染者が少なかったはずのユダヤ人が迫害され、魔女狩りが広がったように、このような出来事は歴史上繰り返されてきた。新型コロナウイルスで浮き彫りにされた人の醜さに目を伏せてはいけない。他者を知ろうとする気持ち、自分の「無知」を改める寛容さこそが今、必要なのだ。

新型コロナウイルスで学校が休校となり、孤独を感じていたある日、ホストファミリーから連絡がきた。現地でのコロナによる影響や私への心配、そしてまた会いたいという思いを伝えてくれたのだ。国や文化は違うけれど、分かり合うことはできる。永井隆博士が謳う「己の如く人を愛せよ」という言葉が心に浮かび、自然と頬が緩んだ。過去の人々の教訓から学びの種を得、未来を生きる人々のために芽吹かせることは、今を生きる私たちにしかできないことだ。互いに理解し合い、心を通わせた先に広がるものは、差別のない美しい世界に違いない。そう願いを込めながら、「必ず会おうね」と私はスマホに打ち込んだ。

佳作

生まれた意味。生きる意味。

沖縄県立球陽高等学校二年

瀬底

蘭

「プ・プ・プ・プ。黙とう！」

今年も六月二十三日正午、静かに目を閉じる。今から十七年前の慰霊の日。丁度正午を過ぎた頃、私は生まれた。私の誕生日は、沖縄県だけが毎年学校が休校になる日。戦争犠牲者の御霊を慰め、恒久の平和を願う日。そう「沖縄慰霊の日」だ。幼い時は、自分の誕生日が毎年休日になる事が嬉しくて、その大切な日をただ楽しく過ごしていた。でもいつからか、誕生日を聞かれると、何となくはぐらかしたくなる複雑な心境を持つ自分がいた。

小学6年の時、学校での平和集会で取材に来ていた新聞記者に偶然声をかけられ、私の誕生日が慰霊の日だった事で、平和への想い、自分の誕生日への思いを取材され紙面に載った。自分の誕生日へ何となく抱いた後ろ向きな気持ちと初めて向き合った我が子の心境を私の母は間接的に初めて知る事になった。そしてそれに答えるように、母はその年の慰霊の日、私の十二才の誕生日に、初めて私が生まれた時の事を話してくれた。

「なんでまた慰霊の日なんか生まれくるかねー、可哀想な子だねー」

私の誕生を家族や病院スタッフ皆で喜びに溢れた幸せな時間の中で、訪れた面会客の1人のその言葉にその空気は一変した。

「毎年、亡くなった御霊を思って、線香に灯し手を合わせる日に、私達家族はケーキをろうそくを立て、この子の誕生や成長を笑顔でお祝いしているのか。この沖縄でこの日に生まれてしまった娘は、この先ずっと特別な自分の誕生の日を心から楽しめない可哀想な子になってしまうのか……」

病室のベッドの上で私を抱きながら、誕生の嬉し涙と、申し訳なき

の苦しい涙が流れる母に、私の祖母や曾祖母はこう言ったそうだ。

「母親のあなたが何泣いているの。戦争で苦しんだ人達が残してくれた平和な世の中だからこそ、生まれてくれた命なんだよ。慰霊の日には沖縄戦が終わった日。それは沖縄の平和な日々が始まった日でもあるんだよ。だから、この日に生まれてきてしまったんじゃない、この子は平和を繋げる為に、この日を選んで生まれて来たんだよ。だから可哀想と思うじゃなく、戦争で苦しんだ人達に感謝して、今日のこの子の誕生を心から祝いなさい！喜ばない！胸を張って育てなさい！」

生まれたばかりの私を囲んで4世代で抱きしめ合った事を母は涙ながらに話してくれた。

そんな、私の誕生も成長も喜んでくれた今は亡き曾祖母も、現在の平和の世の中に貢献してくれた戦争体験者の1人だった。

戦時中、防空壕内で、生後間もない祖母が泣き止まず、周りへの迷惑を考え覚悟を決め親子二人だけ外に出た瞬間に、その壕に敵の爆弾が落ちて沢山の人が負傷したそうだ。その時赤ん坊だった祖母が泣いていなければ、祖母は大人になれず私の母も生まれずにきっと私もこの世に存在しなかった。色々な奇跡・色々な意味があつて命は繋がっていくのだ。

三百六十五日。毎日が誰かの誕生日で、誰かにとつての特別な日。そして、私が慰霊の日に生まれたように終戦の日や原爆の日、世界同時テロの日や震災の日、笑顔では過ぎせない日に生まれ、複雑な思いをしている人もいるかもしれない。でもきつと、この世に生まれた私達一人一人の命には必ず大切な家族の想いがあり、生まれた日には必ず何かしらの意味があると思うのだ。

今の私なら言える。私の誕生日は六月二十三日慰霊の日。命を繋ぎ、平和な世の中を繋いでいく為に生まれてきたと。そして、誕生日ケーキ上に毎年増え続けていくろうそくを大切な人達に囲まれ、吹き消し、笑顔で祝って貰えるような平和な世の中がこれからもずっと続くよう願いながら、来年の慰霊の日もまた、自分の誕生日を迎えようと思う。正午、静かに目を閉じ、手を合わせながら。

佳作

未来への決意

東洋英和女学院高等部三年

陸くが 杜と緒お子こ

「おばあちゃま、”ぎゅう”しよう!」

祖母と別れる時、私と弟はいつもこう言っただけ抱きしめる。祖母は七十五歳まで働いていたが、八十歳になった今、忙しく働く母を助けるため、月に何度か山梨から私達の住む横浜まで来て、美味しい食事を作ってくれる。その祖母と会えなくなってもう四カ月になる。コロナウイルスの感染を防ぐためだ。

「これは闘い。まるで戦争、会えなくてもね、じつと我慢。疎開と一緒に。」

と祖母は言った。

「会いたいねえ。」

電話越しの声はすぐ寂しそうで、私は涙が止まらなくなった。

話は変わるが、私には沖繩に住む一〇二歳になる「心友」がいる。戦争の悲惨さから目をそむけてきた私に、戦争の虚しさや悲しさ、平和がいかに大切かを教えてくれた「心友」である。この友は百歳を迎えた時、終戦からずっと語り返さなかったために「一冊の本に書き上げた。そして、しわしわの手にぐっと力を入れて「忘れてはいけないよ」と言っただけ私にその本を手渡した。この言葉の重みやその手の感触を私は忘れることができない。私はこの春、この友に会いに沖繩へ行くことにしていた。戦争を知るために、平和を知るために、本に記されている場所を巡ろうと思っていたのだ。しかし、コロナによりこの計画も中止となってしまった。体が弱っていると言っていた友。元気にしているだろうか、また会うことができるだろうか。日常が日常でなくなってしまう。瞬く間であつた。

祖母は終戦の時、まだ小さな子供だったそうだった。しかし、常に命について考えていたという。今日「バイバイ」と別れた人と二度と会えないこともあつた。送り出す時、次に会えるのはお骨かもしれないという覚悟もあつたそうだ。コロナ感染で亡くなった方も最後まで家族に会えず、お骨になって家に帰るのだという。「戦時中と同じだ」と私も思った。大切な人の顔を見て、手を握り、最後のお別れができない恐怖を私は初めて知った。

平和とは、世界中の人々が心身共に健やかで、安全に過ごせることから始まるのではないか。各国のコロナ対策や行動の違いを見て、なぜ、平和の守り方が国によりこんなに違うのか分かった気がした。しかし、平和を守るためには世界が一つにならねばならない。世界の願いは同じではないか。大切な人達を「ぎゅう」として、一緒に食卓を囲み、楽しいねと笑い合う、そんな日常を守りたいのではないか。今まで、平和戦争のない世界、と単純に考えていた自分が恥ずかしくなつた。コロナのように多くの人の命を奪う病、さらに差別、犯罪など、平和を奪ってゆくものは私達の周りに溢れていることに気がついた。

私の学校はキリスト教教育を基盤としており、特に「隣人愛」については深く学び、常に心に留めて学校生活を送っている。『何か力になりたい』そんな気持ち溢れたのは、ダイヤモンド・プリンセス号が横浜に停泊し、多くの国の人々がコロナ感染拡大防止のため隔離され、不安の中過ごしていると報道で知った時だった。ハンドベル部で中学生の指導者をしていた私は、海外の方にも伝わるメッセージのある曲を後輩達と演奏し、少しでも癒されますようにと願いを込めて船内に送った。この想いは「隣人愛」から生まれたものだ。この「隣人愛」の精神が世界中に広がることこそ平和への近道ではないか、と一生懸命に演奏している後輩達を見て強く感じた。

心友からの平和のバトン、祖母から受け継がれている命のバトン、そして「隣人愛」のバトン。私は「どう生きていくか」ずっと考えてきた。そして、決意した。私は法律の道に進み、「隣人」に手を差し伸べられる人になりたい。これが私の未来への決意だ。

最優秀賞

恐ろしい記憶

山口県

久原静子

戦火におびえている人々の姿を海外のニュースなどで見るにつけ、渦中にいる若い女の子たちがどんなことを考えているのか、いつも気になる。というのたびたびの空襲で疲弊していたあの頃の自分とつい重ねてしまうからだ。

第二次大戦末期、私は女子校の一年だった。この頃は私の住む下関もかなり攻め込まれ、毎日のように空襲警報が鳴っていた。私の友人・知人も何人かその犠牲となったが、焼夷弾が背中直撃した近所のおじさんの死はあまりにもいたたましなかった。しかし、そんな中でもなんとか学校だけはかろうじて戦禍の影におびえながらも焼かれずにすんでいた。当時の私にとって学校は、友達と交友を深める最も心の癒される場所であった。家で辛いことがあっても学校で友達とたわいもない話をしていれば自然と気分も晴れたものだった。ところが戦争が進むにつれて、それまでの女子生徒らしい話題から次第に遠のいていくのを肌で感じずにはいられなくなっていた。そんなとき事件は起きた。

その日は朝から曇っていたが、対岸の北九州はよく見えていた。小倉には兵器工場があったので、米軍の標的になっていたが、敵機は、あの銀色に輝く恐ろしく巨大なB二九である。はじめて見たときは不覚にも美しいと思っ

しまった。また金属という金属をほとんど没収されていた私達にとって、あれだけふんだんに使っているアメリカという国はすごいと思ってしまったのだ。こんな私は非国民だと思いながらもその大きさに圧倒され、つい心が引かれていたことにいつも後悔の念を感じていた。

そのときだ。とてもかなわないと思ったのか、零戦は捨て身の作戦に出た。何と神風のようにB二九に体当たりを始めたのである。そして、なんとそのうちの一機が見事命中。黄色い閃光を発し、そこからB二九は黒い煙をもうもうと吐きながらゆっくりと地上に向かって旋回し始めた。それを見ていた私達は狂喜乱舞して、お祭りのような大歓声をあげたのを昨日のことのように覚えている。

当時神風特攻隊は私達女子高生にとっては憧れの的で、教室でもその話題になるとキャーキャー言っていた。実際、それは今の女子高生のアイドルに対してのそれとそんなに差異はなかったかもしれない。しかし、同じ憧れでも内容が違う。彼らの自らを犠牲にして敵の軍艦に体当たりする姿が、この上なくカッコよく見えたのである。今だったらまさに「クレージー」であるが、当時の私達には、とつともなく「ワンダフル」だったのである。

結局、敵機を墜落させるまでにいたったのは、この一機だけであった。墜落したB二九の乗組員の何人かが、下関の彦島に落下傘で降りたのを聞いたのは、翌日の学校でのことだった。

「ねえねえ、アメリカ兵が彦島に降りたらしいけれど、どうなったのかしら。」

「捕虜にしたらしいよ。」

「ええー、何で降りてきたらすぐに殺さなかったのよ。」

「信じられない！皆で殺しに行こうよ。」

これは映画のひとコマではない。れっきとした当時の私達の教室での会話である。そしてこの後、槍を作り、刺し殺しに行こうという相談がまとまったのである。当時、十五〜六歳の女の子がクラスで平然とこんな話をしていたわけである。それだけアメリカ兵が憎く、皆が殺しても飽き足りないくらいに思っていたことは事実だろう。しかし、そうはいつでも、うら若き乙女がいくらか戦争中とはいえ、発する言葉ではないだろう。今から考えると実に恐ろしいことではある。

現代の女子高生なら血を見ただけでも気絶するくらいの子がいるかもしれないが、当時は人を殺すことに対して全く平気だったのである。私自身も心の底からアメリカ兵を殺す計画に対して何の躊躇も感じなかったことを記憶している。当時の軍国主義が完全に善悪の判断を麻痺させていたといっていだらう。いわゆる戦禍にある国にとっては、それはとりわけ異常なことではなく、ごく自然なことだったのである。

私にとっては、これはどうしてもぬぐいきれない恐ろしい記憶である。戦争というものは、人々の住む町自体を破壊するだけでなく、人間の心をも破壊してしまうものなのである。

優秀賞

「今」を生きる私たちにできること

鹿児島県

なか はら あい な  
中原 愛 水

戦争、平和。皆さんはどれくらい頻度で考えるだろうか。戦争を経験された世代の方や職業柄、これらの言葉に携わる方は日常的に考えるだろう。しかし、私と同年代の若者はどうだろうか。私は今年で二十歳になる。友達との会話で戦争や平和について語り合うことはまずないと言っている。これが現実だ。戦争がない日本。平和な日本。呼吸をして生きることと同じくらい当たり前ののだ。

ある夏の日。大学で、戦争についての講義を受けた。「言葉では語れない。この動画を見なさい。」

教授はそういうとある一本の動画を流した。私の目の前に映し出された光景。それは信じがたいものだった。戦時中の日本。痩せこけた人々。鳴り響くサイレンの音。次々とふってくる爆弾の数々。真っ黒に焼けた町。そして、歴史の教科書で目にした「欲しがりません勝つまでは」の文字。普段は話し声が聞こえる教室も、シーンと張りつめた空気が漂った。授業を終え、友達と初めて戦争について話した。それぞれが祖父母に聞いた戦争の体験談。広島や長崎の資料館で見聞いたこと。平和な日本が当たり前ではないこと。様々なことを話した。そして、「今」に感謝して、「昔」を忘れてはならないね、と誓った。

それから間もない日。バスを待っていると一人のおじい

さんに声をかけられた。

「お嬢ちゃん、あともう少しで戦後七十四年を迎えるね。」そう言っておじいさんは戦争について話し始めた。あの動画を見た後に聞いた話だから、おじいさんの言葉一つ一つが胸に刺さった。話を終え、向かいのバス停に目を向けると、欧米風の外国人の男性が立っていた。おじいさんはその光景を見てこう言った。

「お嬢ちゃん達にとっては、かつこよく見えるのかな、おじいちゃん達にとってはだめだとは分かっているけど、敵に見えてしまう。大切な友人を奪われた記憶からね。」と寂しそうに語った。そして、おじいさんの乗るバスが来て、おじいさんは「ありがとう」というように微笑んで、バスに乗った。バスの中から手を振るおじいさんが戦地へ向かうため、家族と別れをする青年にリンクして見えた。さつきおじいさんが戦地へ行く話を聞いていたからだろうか。

そして、三月。集中講義で私はハワイに来た。一番心に残ったのはパールハーバー（真珠湾）だ。ここで私はアメリカ側の視点に立ち、太平洋戦争を見た。ずっと日本の立場で見えていた太平洋戦争。日本の戦死者数。日本人の戦時中の暮らし。原子爆弾を落とされ、日本は負けた。私の知っている太平洋戦争の記憶はすべて日本からの視点だった。しかし、ハワイに来て、気づかされた。この地には日本人によって亡くなった命がある。日本人によって失われた生活がある。同じ出来事を逆の視点で学んだ。それは、戦争、平和を考える上で非常に大切だ。今まで見えていなかったものがありありと見えてきた。また、ハワイで私は

現地の学生と友達になった。日本の文化について教えて、ハワイの文化について学んだ。共に笑い、フラダンスを踊り、楽しい時間を共有した。人種も国籍も違うけれど、本当に出会えてよかったと心底思った。短い期間ではあったけれど、別れの時はとても悲しかった。その時、ふと、あのおじいさんの言葉を思い出した。「私にとっては、敵にみえてしまう。」戦争によって、傷つけあった経験がないからこそ、私は今、このようにアメリカ人と友達になれて、彼女のことが大好きになれたのかもしれない。

役目を全うすることで世界はおのずと平和になる。そう信じている。

戦争の記憶の風化。毎年、原子爆弾が投下された日や終戦の日が近づくと、耳にするこの言葉。確かに今の日本では戦争の記憶は風化している。戦争を経験した世代の方の高齢化。避けられない現実である。しかし、戦争の記憶を直接は持たない、「今」の時代を生きる私たちにしかできないことだってある。私たちは戦争の記憶がない。だから、敵国だった人達を心の底から大好きになって、仲良くなれる。国際交流が発展した「今」だからこそ、現地の国へ赴き、本当の意味で両方の立場にたつて戦争を捉えることができる。戦争を経験された世代の方々は戦争が二度と起きないように、戦争の記憶を、思い出したくない、辛い記憶を、一生懸命伝承してくれている。その活動をされている方々は口を揃えて言う。「これが私たちにできること。」と。同時に私たちにもできることがあるはずだ。戦争の記憶に耳を傾け、知ろうとすること。世界中の人を大きな地球という家に住む家族と思い、大切にすること。様々なことを経験し、多方向から物事を捉えること。各々に各々の役割がある。できることがある。一人一人が自覚をもち、

佳作

十秒の沈黙

東京都

岩崎 恵里子  
いわさき えりこ

1945年—

8月9日の昼前、自宅南側の部屋で7歳の少年は兄と石臼を挽いていた。暑い日だったが、兄の誕生日を祝うために母に頼まれて粉を作る作業は楽しいものだった。

ふと窓の外を見ると、澄んだ青空の中に一機の飛行機がツーツと、街の方向へ飛んで行くのが見えた。それから数秒後であろうか。強い閃光に兄弟は包まれた。その直後、「ドーン」というとつともなく大きな衝撃によって窓ガラスが割れ、兄弟は部屋の隅の柱まで飛ばされた。気がつくと、窓から見える岬の馬小屋が大きく炎を上げていた。落雷の何千倍、何万倍というような眩い閃光から、破壊の衝撃まで、およそ十秒くらいの時間があつたように少年は記憶している。

その後、街の中心部から被爆により負傷した遠縁の女性が家に辿り着き、臨月だった母が看病をしたものの、その甲斐なく一週間ほどで亡くなった。月末には弟が生まれ、その子は「体内被曝」の調査対象となり、成人するまで健康診断が続けられた。子どもは無邪気なもので、検査に行くと言え「鉛玉」が楽しみだったという。

1960年代—

少年は戦後の新しい教育の中で育つた。日本中がそうで

あつたように、高度成長期へ向けて経済が活気づくにつれ、アメリカの洒落た文化や自由な空気に触れ、憧れも抱くようになった。大学を卒業後、幸いなことに将来性のある米国系企業に就職することができた。海外へ行くことはまだ簡単ではない時代だったが、初めて米国出張に行く機会に恵まれた。同僚とのパーティーにて。言うべきか言わざるべきか、ひとり、逡巡した。自分の故郷が長崎（NAGASAKI）であることを。このような和やかな場で話せば、どのような反応が返ってくるだろうか。

だが時代が変わつた今、臆して言わないこともまた、恥ずかしい事のように感じられた。なぜなら、あの戦争を乗り越え、両国が平和を築いてこられたのは、一般市民と社会が「互いを理解し、許し合う心」を醸成してきたからこそだと信じるからだ。それに、故郷の苦しみと大河のごとく流れた人々の涙、悲しみを乗り越えた人々の祈りを心底誇りに思う自分が、ここで恥じたり躊躇をすれば、それらを否定してしまうような気持ちさえなつたのだ。

「私の故郷は長崎です。」

それを伝えたところ、ほぼ全員の同僚が、「パール・ハーバー」の悲劇の話題を返してきた。そして、原爆がなければ第二次世界大戦は終結しなかつただろう。原爆がある戦争を終わらせたのだと。

この青年は私の父である。私は、同僚の反応に腹は立たなかつたのかと聞いてみたが、これが当時の一般的な考え方だつたから、彼らは常識的な意見を述べたに過ぎないと批判しなかつた。もし、私が父だつたならば、涙と感情が溢れ出てしまわないよう、架空の高い壁を心の中にも作

らなければ耐えられなかったのではないかと思う。  
2000年代―

私はワシントンDCにある国立航空宇宙博物館を訪れた。同館には、米国の航空宇宙開発の歴史を紹介する貴重な収蔵品があり、広島に原爆リトル・ボーイを落とした爆撃機エノラ・ゲイも展示されている。ふらりと足を運び、実物に近づいた時の恐ろしさは今も忘れられない。人類が初めて使用し、未曾有の被害を与えた原子爆弾の模型が他の展示物と並び、無防備な姿で展示されている現実に眩暈がした。展示物の回りを可愛らしく着飾った子どもたちがはしゃいで走り回っていた事にさえ苛立ちを感じてしまった。この感情は一体何だろう。憤りを覚えることなく平常心で向き合えるつもりで見に行った。だが心の底ではもっと、平和的なメッセージや謝罪や同情の表明を期待していたのかもしれない。「原爆」は展示空間の平凡な日常の中に、いとも平然と溶け込んでいた。そのことに驚き、失望し、泣けてしまったのだ。

この経験を通して私は、人が悲惨な出来事を忘却する事は簡単ではないと悟った。現在も世界は暴力に溢れている。宗教、人種、主義思想、国境が人々を断絶し、それぞれの「正義」を信じる心が皮肉にも憎しみを生む。戦争は必ず互いに犠牲者を出す。どんなに難しくても相手の立場に立って考える想像力を持つことが平和への第一歩なのだと思う。

原爆投下直後、人類の「非力」が凝縮された不気味な「十秒の沈黙」があった。取り返しがつかない悲劇から後戻りはできない―でも人々は美しい昼前の夏日をまだ確か

に生きていた…。平和を願う時、私は目を閉じてその瞬間に思いを馳せる。輝かしい命を一人として傷つけない世界の到来を願いながら。

佳作

あなたに届け 祈りの輪

徳島県

渡辺 恵子  
わたなべ けいこ

二〇二〇年の幕開け早々から、世界中で不穏なニュースが飛び交うようになってきた。「新型コロナウイルス」。その得体の知れない不気味なウイルスは未だに衰えを知らず、我が国でも、いたるところで猛威を振るっている。

そんな状況下で、七月現在、岩手県だけが感染者ゼロを更新中だ。

私は岩手在住の友人がいる。彼女は大阪出身で、三十年前、結婚を機に移住した。

先日、久しぶりに電話した時、開口一番にコロナの話題になった。

「岩手県の人たちって、ほんまにすごいなあ」

私のその言葉に、彼女から深いため息がもれた。

「そのセリフ、聞きたくないねん」

彼女は沈んだ声で、ポツリポツリと今の心境を語り始めた。

日本中でコロナが蔓延し始めた初春の頃、首都圏では感染者数がどんどん増加し、他の地方でも少数ながら、感染者が出現するようになってきた。それでも尚、ゼロを維持している岩手に、彼女は県民の一員として誇らしかった。

しかしゴールデンウィークを過ぎた頃から岩手県民の感染者ゼロに対する賞賛や驚きの声が、全国ニュースで頻繁

に流れるようになってきた。

彼女はその頃から、極度の緊張感と恐怖心に苛まれるようになった。

彼女の心の中にあるのは、たった一つだけ。「私や自分の身内から、岩手で一人目の感染者を、絶対に出したくない」だった。故郷で施設に入所している高齢の父親のことが心配だったが、「大阪から『コロナ』の土産を持ち帰ったら大変や。これはお前一人の問題やない。岩手の名誉にかかわることやから」と、娘の帰省を頑なに拒否するらしい。

彼女はこの数ヶ月、毎日二十四時間、頭の中はコロナのことだけで埋め尽くされてしまった。やむを得ず買物に行った時も、常に他人との距離が気になり、周りにいるすべての人間が自分の敵であり、加害者であるような錯覚に陥ることがあるという。

彼女は今まで、私も含めて県外の友人たちから必ず言われたであろう「すごいね」という言葉に、どれだけプレッシャーを感じてきたことだろうか。

片山はるひさんの、「永井隆 原爆の荒野から世界に『平和を』」という著書の中に、私が感銘を受けた永井博士の文言がある。

「苦しみを体験したことのない人は無邪気である。辛い目におうたことのない人は無遠慮である。心に傷のない人は鈍感である」と。

私が彼女に発した言葉は、まさに無邪気で無遠慮で鈍感であった。

私が幼少の頃、祖母や両親から、今の日本は戦争がない

から平和なんだと教えられた。そして、こんな時代に生きていられるあなたは最高に幸せなんだと。

でも今の日本は、決して平和だとは思えない。ただ戦争が起こつていないというだけだ。

私たちは今、見えない敵との攻防戦をしている。その敵にやられても、対処するワクチンも、治療薬もない。心ない人々の差別と偏見は、病と闘っている感染者に、二つ目の敵を与えるのと同じことだ。

地元でコロナ感染者が出ると、人々は、どこの誰なんだと、所在を突き止めようとす。そして感染者本人だけでなく、その家族まで排除しようとする。

日本は今、イジメ社会の真っ只中にいる。陽性反応が出た人は犯罪者扱いだ。当事者のプライバシーまで尾ひれはひれをつけ、面白おかしくネットで拡散する。これではコロナウイルスではなく、人間に殺されてしまう。

みんな明日は我が身なのだ。今日、他人を中傷したり、侮蔑した人が、明日は、される側になってしまうこともあり得るのだ。

彼女は最後に、涙声で言った。

「もし岩手で、自分以外の感染者第一号が出たとしたら、私はその人を絶対に恨まない。だって、自分の身代わりになつてくれた人なんやもん」

その言葉には、彼女と同じ境遇にある県民たちへの思いが詰まっているような気がした。

この先、岩手県に、もしも感染者第一号が出たとしても、地元の人たちはきつと、「みんなの苦しみをあなた一人に背負わせてしまつて、ごめんなさい」という労りの気

持ちで包み込んであげるに違いない。

自分の身代わりになつてくれた人に私たちが出来ることは、早く心の傷が癒えるように祈ることだ。どんなに離れていても、愛は祈りを通して相手に必ず届く。そして祈りの輪が広がれば、必ず平和に繋がる。

それは人類の平和のために、命の灯が消えるまで祈りを捧げ続けてくれた永井博士の遺志に報いることにもなるだろう。

第三十回 島根県雲南市永井隆平和賞 最終選考作品一覧ならびに結果

【小学生低学年の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
石飛 陽奈子	おじいさんに教わったこと	島根県	雲南市立三刀屋小学校二年	最優秀賞
杉本 賢太郎	平和	石川県	金沢市立小坂小学校三年	優秀賞
名原 杏香	やさしいまほうをかけたいな	島根県	雲南市立鍋山小学校一年	佳作
谷戸 晴保	みんながえがおの未来へ	島根県	雲南市立鍋山小学校三年	佳作
岡田 彩希	だいすきなわたしのかぞく	島根県	雲南市立三刀屋小学校一年	
須山 葉月	おかあさん	島根県	雲南市立三刀屋小学校一年	
坂田 優	はかせのことを勉強して	島根県	雲南市立三刀屋小学校三年	

【小学生高学年の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
西原 颯勇	僕にしかできないこと	東京都	こくご塾KURU四年	最優秀賞
岩田 ひなた	お姉ちゃんのそばにいるよ	島根県	雲南市立吉田小学校五年	優秀賞

【中学生の部】

井島 希乃歌	平和の糸を結ぶ	長崎県	長崎市立淵中学校二年	
翁 長華音	平和とはなにか？	沖縄県	西原町立西原中学校一年	
阿部 恵里沙	「次世代が考える 平和のためには」	東京都	東京学芸大学附属小金井中学校二年	
串崎 由菜	戦争のない世の中にするために	島根県	浜田市立弥栄中学校三年	佳作
奥 夏奈	ちっぽけな奇跡	長崎県	長崎市立淵中学校二年	佳作
池田 和音	勉強しなければ！〜悲願のために〜	広島県	盈進中学校二年	優秀賞
幸地 未鈴	「命どう宝」	沖縄県	糸満市立高嶺中学校三年	最優秀賞
氏 名	テ ー マ	都道府県名	学 校 名	賞 名
黒川 海空	心を育てる	長崎県	長崎市立高尾小学校六年	佳作
福間 美月	本当の「平和」	島根県	雲南市立木次小学校六年	佳作
和田 みそら	ちかい	島根県	雲南市立阿用小学校五年	
長崎 恋羽	「如己愛人の世界へ」	長崎県	長崎市立山里小学校六年	
難波 和奏	強さと思いを受け継いで	島根県	雲南市立大東小学校六年	
船井 蒼蘭	「本当の平和」	長崎県	長崎市立山里小学校六年	
宮内 鈴	如己愛人	島根県	雲南市立三刀屋小学校六年	

【高校生の部】

金子芽生	身近な平和	大分県	大分大学教育学部附属中学校二年	
石川万智	繋ぎ、繋げる	沖縄県	糸満市立高嶺中学校三年	
新垣亜未	私が戦争について思うこと	沖縄県	糸満市立高嶺中学校三年	
氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
高橋裕仁	きっとできるから	広島県	盈進高等学校一年	最優秀賞
森田莉子	差別をなくすには	東京都	東洋英和女学院高等部二年	優秀賞
瀬底蘭	生まれた意味。生きる意味。	沖縄県	沖縄県立球陽高等学校二年	佳作
陸杜緒子	未来への決意	神奈川県	東洋英和女学院高等部三年	佳作
下里梨々香	曾祖母の命を紡いで	沖縄県	KBC学園未来高等学校二年	
永瀬愛梨	平和は心から	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	
松田一花	想像してみる力	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	
中西志歩	「かのかたき日を生きた人々」	福岡県	福岡県立博多青松高等学校三年	
野口愛華	本当に大切なことは	東京都	東京都立大島高等学校三年	
渡辺紗於里	如己愛人で繋がる七十五年前と今の私	東京都	女子学院高等学校三年	

【一般の部】

氏名	テーマ	都道府県名	賞名
久原 静子	恐ろしい記憶	山口県	最優秀賞
中原 愛水	「今」を生きる私たちにできること	鹿児島県	優秀賞
岩崎 恵里子	十秒の沈黙	東京都	佳作
渡辺 恵子	あなたに届け 祈りの輪	徳島県	佳作
板倉 孝敬	戦争体験者の眩き	神奈川県	
打浪 絃一	コロナが教える平和への糸口	大阪府	
大村 榛菜	壁ではなく橋を	京都府	
永田 正彰	愛と平和を奏でる音楽	島根県	
村山 守	父の背中から受け継いだ私の責務	神奈川県	
森 惇	「痛みを知って、愛を知る」	千葉県	